

郷土秋津



昭和57年12月

熊本市立秋津小学校

熊本市立秋津小学校 145

秋津公民館図書室蔵書印



はじめに

熊本市立秋津小学校長 武田 信里

この秋津は、私達の郷土の町です。私達は秋津に住み、美しい自然と、先人の残された豊かな文化にはぐくまれて、毎日の生活をしています。そして私達は、これらを愛し、すぐれた伝統をうけついで、よりよい文化をつくりだしていく責任があるわけです。先に進むためには、以前のことをよく知らねばなりません。少しむずかしい言葉ですが、このことを「おんこ ちしん温故知新」といいます。新しいものをつくりだすために、みなさんは、秋津の昔の様子をよく知る必要があるのです。

本校では、本年度郷土教育のじっせんこう実践校として、「郷土を知る学習」をすすめています。その研究資料として、前にだされた「うつつりかわる秋津」の内容を、更に正確に、そしてみなさんが実際に学習しやすいようにへんしゅう編集してみました。

本校の西村先生が地元出身であり、先生を中心に、みんなの先生方が力をあわせてつくられたものです。どうかみなさんも、この本をもとにして、最も身近な、今住んでいる郷土の町秋津の、昔からの歴史をよく知り、これからの、この町の発展に力をつくしてください。

最後に冊子作成に御協力いただきました校区の皆様方に、厚く御礼を申し上げます。

昭和五十七年十二月一日

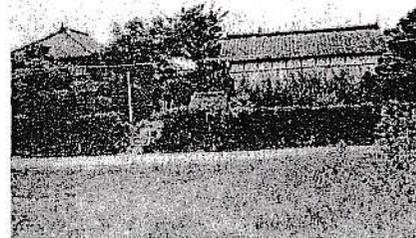
もくじ

はじめに

1. 学校のうつりかわり…………… 1
秋津小学校のたんじょう。ふえる児童数。学校の中のくらし。六三制が始まる。熊本市立秋津小学校となる。創立八十周年をむかえる。木造校舎が鉄筋校舎にかわる。
2. くらしのうつりかわり…………… 7
(1)秋津の人々のくらし。農家の仕事。むかしの農具。
(2)水とのたたかい。の水。江津塘と秋津の水害。「万蔵井手」と「しんじゃ一堀」。木山川と赤井川の改修。土地整地組合。ポンプ小屋。樋門と六反堀。沼山津ぜきと秋田ぜき。突き井戸。水源地。畑地開田。続けられる工事。
3. 秋津の道…………… 15
昔の道。川の交通。木山県道。村の道路
4. 子どものくらし…………… 18
てっだい。ネンガラ。つなひき。もぐらうち。水神さんのまつり。観音さんのまつり。武内神社のまつり。神社のおまつり。宮座。地藏尊まつり。
5. 秋津の遺跡…………… 22
貝原。沼山津縄文遺跡。沼山津手永の会所あと。舟つき場。横井小楠と四時軒。
6. 秋津のお宮とお寺…………… 26
沼山津神社。武内神社。中無田熊野神社。光輪寺。浄福寺。中津代里地藏。うぐいすの観音。○あとがき、他。

1. 学校のうつりかわり

秋津小学校のたんじょう ▶今から百二十年ほどまえの江戸時代、沼山津村と秋田村に寺子屋がありました。そこでは男子ばかりに習字を教えていました。その後、明治七年にそれぞれ学校ができました。今の上田栄起さんのやしき内に沼山津小学校が、野間に秋田小学校がつけられました。最初は学校に行く子どもは少なく、年令もはっきりきまっていません



(沼山津校のあと)一町内

でした。学問の大切なことがわからなかったからでしょう。また「女子には学問はいらぬ」という考えもあって女の子はごくわずかでした。明治二十二年(1889年)に、市町村制というきまりができ、沼山津小学校と秋田小学校が一つになることになりました。今の場所に新しい校舎がたてられ、わたしたちの秋津小学校がたんじょうしました。第一代目の校長先生は、飯田勝雄先生でした。

ふえる児童数 ▶明治二十四年、小学校は尋常小学校とよばれることになり、読み、書き、そろばん、習字を教えました。三十二年には三学級、三十四年には四学級になり、女子の数も男子とあまりかわらなくなりました。勉強する児童がふえたことは、たいへんよいことなので、県から就学奨励一等旗というものをもらったそうです。三十五年には校地も広められ、二教室が新築されました。また沼山津から学校への通学道路も広くな

りました。三十八年には高等科がつくられ、四年生を終えた人が、さらに二年間の勉強をつづけることになりました。そのため学級数は五学級になり、児童数も258名となりました。明治四十年教育のきまりがかわって、高等科がなくなり木山の高等小学校へ行くようになりましたが15年たらずでなくなりましたので、六三制ができるまで、秋津尋常高等じんじょうこうとう小学校としてありました。その後、校地1633坪(5400平方メートル)に広められ、校舎も六教室が新しくたち、児童数342名の、そのころとしては大きな学校になりました。

学校の中の暮らし ▶はじめはまだ学校に行かない子どもがいましたが、だんだんときまりがきびしくなったので、大正時代になると子もりをしながら学校に行く子どももいました。わらぞうりやげたをはき、はだしで行く子もいました。男子はぼうず、女子はおさげでみんなもめんのきもの着物をきていました。べんとうは、にぎりめしに梅ぼしやうりづけなどかんたんなものでした。勉強は、修身、読み方、つづり方、書き方、算術、さんじゆつ唱歌、しやうか図画、しゆこう手工、体そうなどがありました。四年生になると、裁縫理科がくわわり、五年生から地理、国史などもありました。図画はクレヨンを使い、五年生から絵の具になりました。また、大正時代になると四年生から旅行がありました。馬車五、六台にのって河内に行きました。五年生は三角旅行で、朝四時に出発して熊本駅まで歩いて行きました。六年生は大牟田旅行でした。子どもたちはみなぞうりをはいて喜びいさんで行きました。そのほかに春、秋の運動会と、三月には学芸会がありました。村

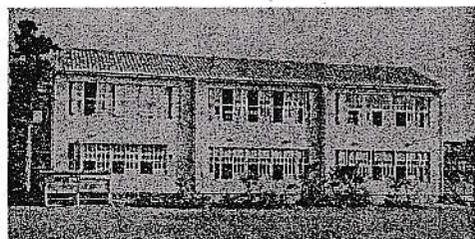
内では弁論大会も行なわれました。昭和十二年ごろ始まった戦争は、始め中国でしたが、だんだんと大きな戦争になり、アメリカ、イギリスなども敵にまわし、世界戦争になりました。秋津の村からもたくさんの人が戦争に行きました。働き手をうしなった家では、田植えやいねかりの時に困りましたので、上級生が手伝いに行きました。戦争がはげしくなり空しゅうけいほうのサイレンがなると、今の体育館のところぼうくうに作られた防空ごうにひなんしました。またそのころ運動場の半分は、いも畑になり、食糧もだんだん足りなくなっていました。昭和二十年になると、日本各地が空しゅうを受けるようになり、秋津校も分散授業がなされ、先生が各町内にそれぞれ出かけて行きました。

六三制が始まる ▶昭和二十年八月十五日に戦争が終わって、新しい考えのもとに勉強が始められることになりました。昭和十六年四月から秋津国民学校とよばれていたのをあらためて、秋津小学校とよぶことになりました。昭和二十二年四月から、すべての児童が、小学校六年、中学校三年の勉強をすることになりました。これが「六、三制」です。平和と民主主義の考えのもとに、男女いっしょに勉強する新しい世の中になりました。しかし戦争のあとは、そまつな教科書と用紙を使って、不自由な毎日に負けず勉強しました。

熊本市立秋津小学校となる ▶あれていた学校は、だんだんととのえられ、阿蘇登山や臨海学校、運動会、学芸会と行事もふえてきました。茶つみも五月にあってました。学校のまわりと、今のプールのあたりに茶の木があったのです。こうして昭

和二十九年に、上益城郡秋津村が熊本市秋津町となると、学校も熊本市立秋津小学校となりました。それからつぎつぎと学校の様子はかわっていきました。体育しせつのすべり台やはん登^{とう}棒^{ぼう}が取りつけられたり、給食が始まったりして昭和三十一年に給食室ができ、パンと脱脂^{だっし}ミルクだけの給食だったのが完全給食になり、今のような学校給食になりました。昭和三十四年にはプールができました。それまでは子どもは木山川の中無田橋のわきで泳いでいたのです。秋津町に住宅がふえるにつれて、

児童数もどんどんふえていきました。教室がたりなくなり、昭和三十五年にはじめての二階だでの校舎がつくられ記念式がありました。その時校旗



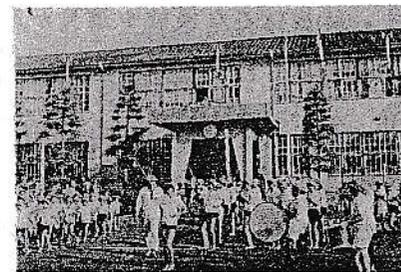
(昭和39年、二階建ての校舎ができる)

が作られ、校歌も応募作品の中から決められました。その後昭和三十九年にも東がわに、二階だて六教室ができ十七学級の学校になりました。熊本市が東の方にひらけてきましたので、健軍地区の児童数がどんどんふえてきました。そのため昭和三十七年に、泉ヶ丘小学校の分校として、若葉小学校ができ、秋津小学校の西無田地区の児童が、一部わかれて行きました。

創立八十周年をむかえる ▶昭和四十五年十月二十五日、秋津小学校がうまれて八十年目のお祝いの式が行われました。また文化祭やてんらん会や大運動会が記念に行われました。記念誌「秋津」もつくられました。それには先生がたや卒業生の

思い出などが書かれています。これまで六千四百有余の人々が

秋津小学校で学びました。その中には東宮伝育館^{とうぐうでんいくかん}(皇太子の先生一今の天皇の先生)になった弥富破魔雄^{やどみはまお}さん、農林政務次官になった三善信房^{みやしのぶふさ}さん、第七代熊本市長になった

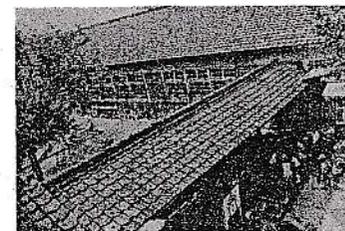


創立80周年記念大運動会(鼓笛隊)

高橋守雄さんなどがおられます。高橋市長さんは、三十九才の若さで市長になり、熊本市に電車を走らせたり、水道をひいたり、大きな仕事をしました。八十周年のあと、秋津小学校の児童数は年ごとにふえつづけました。そこで市は、木山県道の北がわに、新しい小学校をたてることにしました。昭和四十六年四月桜木小学校ができました。秋津小学校から230名の友だちがわかれて行きました。昭和四十二年体育館の建設を進める会ができ、市にはたらきかけた結果、運動場が広げられたり、石垣工事が行われたりして、準備がととのえられ、昭和四十七年に体育館ができあがり、雨の日でも体育ができるようになりました。体育館は、体育の学習はもちろん、集会や式になくてはならないものです。

木造校舎が鉄筋校舎にかわる

▶昭和五十三年の夏、運動場の北がわ半分に、プレハブ校舎がたてられびっこしを終わると、すぐに古い校舎がこわされ始め



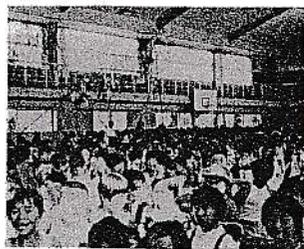
(解体前の校舎)

ました。鉄筋の三階建て校舎をたてるための工事が始まったのです。いろいろな機械や道具が運びこまれ、はげしい音と共に工事が進められ、二期、三期と工事が進んで、昭和五十七年三月末、全部の校舎ができあがりました。その間、児童はプレハブ校舎とせまい運動場で幾年かを不自由な学校生活でがまんしました。全校舎鉄筋三階建てのこの姿はほんとうにすばらしいものです。昔の秋津校の姿とはたいへんなかわりようです。何本かの古い木と忠魂碑が昔を思い出させるくらいです。積み重ねられた伝統は、明るく、正しく、たくましい秋津の子どもに受けつがれていくことでしょう。

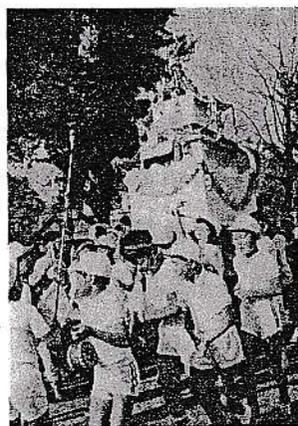
○【子どもたちで計画し、子どもたちでする楽しいもよおし】



(たこあげ集会)



(たなばた集会)



(おみこし集会)

2. 暮らしのうつりかわり

(1) 秋津の人々の暮らし ▶今からおよそ百年前の明治時代も、秋津では大部分の人が、農業をして暮らしを立てていました。村にはところどころに店があるだけでした。大正時代も、村の70パーセントが農業をしていたそうです。これは十けんのうち七けんということです。昭和のはじめごろ今の一町内に百けん、二町内に八十けんぐらいの農家がありました。農家ではつるべ井戸で水をくみ、かまどでご飯をたきました。あらい物にはわき水を使いました。ふるは五右衛門ぶろで、わらや作物のからをもやすのにべんりでした。そしてふるわかしは子どもの仕事になっていました。昭和二十年頃の農家は、たいてい馬を一二頭かっていました。それは田や畑をたがやす仕事を馬にさせるためでした。昭和二十七年頃、農家の数は60パーセントにへってきました。会社や店につとめる人がふえてきたのです。その頃はまだ今の三町内を中無田、五町内を新村とよび、四、六、七町内は広々とした畑ばかりでした。五十三年頃になると農業ばかりでくらす家は、わずかに五十けんぐらいになりました。二十九年に熊本市にはいり、村から町になりましたが、秋津の姿も農業の村から住宅の町にかわってきました。このかわりかたは年々はげしく、いずれ秋津の町から畑はなくなるかもしれせん。

農家の仕事 ▶秋津では今も昔も米づくりにはげんでいます。きかいが無かった昭和三十年頃までは、馬の力と人手だけで仕事をしました。まず、「しろかき」という田づくりをしなけれ

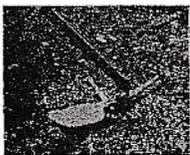
ばなりません。馬のあとにすきをつけ、人がそれをおして土をかえして行くのです。朝から晩までどろだらけになってはたらきました。田の草とりの仕事は、「がんづめ」という車のついたものをおして使いました。稲かりもかまでかりとっていました。どの仕事も体力のいる仕事でたいへんなものでした。



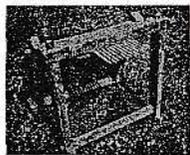
(がんづめ)

秋津の田んぼは水が多すぎる所があって、板をしいたり、「田げた」を使ったりして、稲かりをしました。そのほか、あわ、さつまいも、大豆、あずき、大根、はくさい、さといもなどもつくりました。麦はお米のうら作としてつくっていました。今は米以外の作物は、ビニールハウスで、野さいやすいか、メロンなどをつくっています。

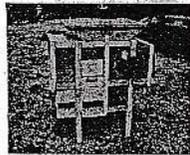
むかしの農具 ▶むかしの農家の人たちがもっともたいせつにしたのは、馬と農具でした。馬には、馬車はもちろん、まが、すき、かいてんまなどを引かせて仕事をしました。だっこくには、足ふみだっこくきや、せんば、ぶるこなどを使いました。また、たがやしたり、草取りをしたりするのに、くわ、三本ぐわ、とうぐわ、てずき、がんづめなどを使いました。そのほか竹細工のこいじょけ、ざる、み、とうみ、足ふみ水車みずぐるまなどがあります。これらはみな長い年月の仕事のなかから考えだされくふうされたものです。農家の庭が広いのも、そこが仕事する場所だ



(すき)



(せんば)



(とうみ)

からで、「ねこぶく」というわら縄なわであんだあつ広くて厚い丈夫なしき物に、もみ、麦、大豆、あずき、あわなどをかんそうさせていました。

(2) 水とのたたかい

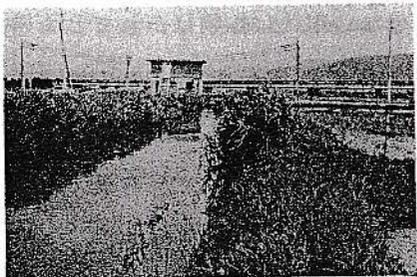
の水 ▶秋津は木山川(秋津川)をさかいに、北がわは土地が高くなっていて、広い畑であり、南がわは赤井川、矢形川が流れて水田が広がっています。畑は火山灰で、水もちが悪く、雨の少ない年には作物はかれてしまいました。大雨がふると「の水」といって、畑の上を川のように水が走り、土をおし流しました。南がわの水田は、反対に水はけが悪く、毎年水害にみまわれました。そのため米がとれるのは、三年に一度くらいでした。

江津塘どもと秋津の水害 ▶熊本城主であった加藤清正は、自分の領土を水害から守り、りっぱな水田を開いて、たくさんの米をとろうと計画しました。そのひとつが、加勢川かせの堤防工事ていぼうでした。江津から川尻方面にかけて大堤防ができ、それまで沼地で役に立たなかった江津、田迎みゆき、御幸あたりの土地も、みごとな水田になりました。そして熊本城の米ぐらといわれるようになりました。大堤防ができたために、秋津の方はますます水はけが悪くなり、今まで以上に水害は、はげしくなりました。毎年水害に困った人たちは、ついに部落をぞって安全な場所につり住あがりむみました。新村とも上無田ともいわれていた今の秋津新町(五町内)がその部落です。

「万蔵井手」と「しんじゃ一堀」 ▶くり返される水害にこましゅうった人たちは、どうにかして水害をなくし、米の収かくを高め

て、くらしをよくしようと考えました。そのくふうの一つに「井手」とか「堀」とかいられている用水路があります。木山川と赤井川の間のはぼ中央を、東から西へ流れている「万蔵井手」という井手があります。この井手は、その時、郡代をしていた荒木万蔵という人が江戸時代の文化年間につくった井手です。また、東無田から西無田まで流れている堀は、「しんじゃ堀」といい、中無田の庄屋新左衛門という人が、文化年間より前の

寛政年間にほりました。浦川橋で万蔵井手としんじゃ堀が一しょになっているので二つのことを、「浦川」とよぶ人もいます。浦川橋のところに新左衛門の墓が今も残ってい



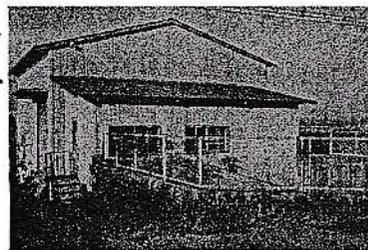
(万蔵井手)

ます。現在秋津の田んぼが圃場整地中なのでいづれこれらの川も変わった姿になってしまうでしょう。これらの井手や堀ができて、前よりも水はけが良くなりましたが、毎年の水害はかわりませんでした。

木山川と赤井川の改修 ▶緑川の大改修にあわせて、昭和八年から、木山川と赤井川の改修が行われました。加藤清正の江津塘改修につぐ大工事で、上流の新川までの改修でした。となり
の広安村(益城町)とも相談をし協力してもらって昭和十一年にできあがりました。川はばが広くなり、堤防もずっと高くなりました。村の人たちは、これで水害はなくなるだろうと喜びあいました。

土地整地組合 ▶ところがまた、新しくこまったことがおこりました。木山川と赤井川にはさまれた水田は、夕立ちの雨水さえひかなくなり、水田にたまってしまふようになりました。大雨がふると、二週間以上も水がひかないことがあります。これは木山川と赤井川の堤防が高くなったので、水を流し出すことがうまくできなくなったからです。そこで、秋津村と飯野村の
人たちは、「土地整地組合」をつくり力をあわせて土地の改良につとめました。初めにとりくんだのが、水田の水をくみ出す動力ポンプの工事でした。そのほか排水路やせきを作ることなど、土地改良の工事をすすめました。

ポンプ小屋 ▶赤井川の北がわ堤防に取りつけてある動力ポンプで、水田にたまった水をくみあげ、赤井川に流すのです。動力ポンプは三つとりつけられてあります。三つが同時に動くと一分間に二百立



(ポンプ小屋)

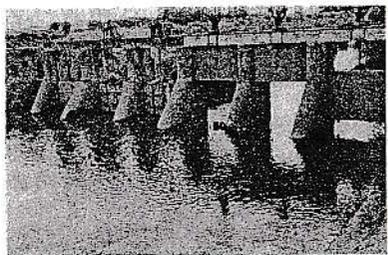
方メートルの水がくみあげられるのです。昭和二十二年二月から二十三年七月までかかってできあがりました。そのおかげで、およそ二百ヘクタールの水田を、なんとか水害から守ることができるようになりました。

樋門と六反堀 ▶ところが、昭和二十六年、また大水害がおこりました。益城平野は一面、湖のようになり、堤防も見えずポンプ小屋も水につかって、水田は十四日間も水がひかず、ポンプは、はたらかなくなりました。そこで考えられたのが、樋門と

排水路をつくることでした。水のはき出し口になる樋門を二つ増設し、排水路を四キロメートルほど新しくつくりました。この排水路を「六反堀」といっています。昭和二十八年の「六、二六水害」といわれた熊本の大水害の時にも、秋津の水は三日間で水がひいてしまいました。これは村の人たちにとって大へんにうれしいことでした。水はけの良くなった水田は作物がよくできるようになったのです。しかし、大自然あいての農業には、思わぬ大雨にて水害をおこすこともあります。秋津の水田地帯は、大雨が長くつづくと同津湖の方から水がおしあげてくるのです。そこで県では大々的な工事をやる計画をうち出しているようです。加勢川周辺の改良がなされて、はじめて秋津の水田は水害がなくなるのです。昔の人々の水との戦いのあとも水田の圃場整地のためになくなってしまいますが、りっぱな水田になるためには、いたしかたのないことですね。

沼山津せきと秋田せき ▶木山川（秋津川）に二つのせきがあります。

せきというのは、田植えや稲の育つ時期に、川の水をせきとめて、田に水をひき入れるためのものです。沼山津せきは、益城町の福富橋のところにあります。石だた



（秋田せき）

みのりっぱなせきです。秋田せきは三町内の野間橋のしたにあります。鉄のとびらが上下に開閉するりっぱなせきです。

突き井戸 ▶秋津村の人たちは、水害になやまされたが、反対

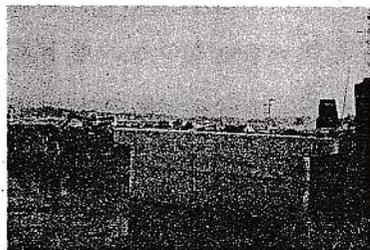
に水がなくて困ることもありました。田植えの時に雨が少ないと、夜もねずに水をひきました。「水あらそい」というけんかもおこりました。昭和のはじめ頃、たまたま豊かな井戸水をほり出した人がいました。沼山津からも石油が出ると信じて、石油井戸をほった上田龍三郎という人です。沼山津の人でたくさんのお金を使って五年間もほりつづけましたが、石油は出ませんでした。かわりにきれいな水がわき出てまいりました。村ではこの水を水田に引く計画がたてられました。このわき水を小川におとし、せきとめて逆サイホンの原理によって、木山川の底を鉄管で通し水田までひくのです。この水は三十ヘクタールの水田をうるおし、小川は物を洗ったり、沼山津の人々に大へん利用され感しゃされました。一町内の公民館の庭に、上田龍三郎と書いたけんしょうの碑は、その徳をたたえたものです。昭和十六年には、広崎と沼山津のさかいの木山川の堤防のすぐ南がわに井戸をほりました。これによって三十ヘクタールの水田がうるおっているのです。

水源地 ▶沼山津一帯は地下水の豊富なところです。熊本市は水不足の対さくをこの地に求めました。今沼山津の水田のあちこちに小屋が建っているのは地下水をくみあげているものです。今また赤井川の北側に大きな工事をやっているのも、地下水をくみあげて集める大きなタンクです。これらの一部の水は健軍の水源地に送るのです。

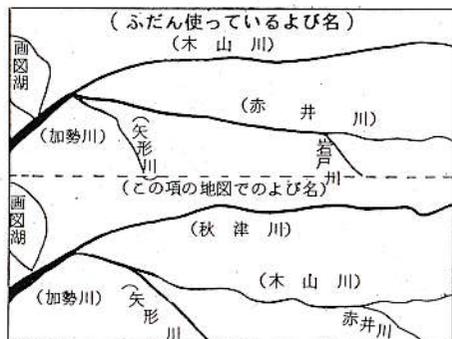
畑地開田 ▶農家の中には水田をもたない「畑百姓」も多く、「畑地開田」といって畑のすみに井戸をほって水をくみ上げて

水田にして使うこともやりました。昭和四十八年頃から畑地に
こがね色の稲はが実るようになり、農家の人々は以前の野^{のいね}稲の
時代とくらべて、安心して仕事ができるようになり、くらしも
豊かになってきました。

続けられる工事 ▶今木山川も矢形川も静かに流れています。
秋津の人々にとっては、稲を実らせてくれる川であり、水害を
もたらす川でもあります。川は泥や砂をおし流して来ますので
浅くなり流れが悪くなります。いつかまた、大水が堤防を切っ
て、美しい水田をおそうかもしれません。そこで今大改修が進
められているのです。川はばを広くしたり、川底をはったり、
まがったところをなおしたりして、堤防をコンクリートにして
いるところもあります。古い木の橋をコンクリートの大きな橋
につくりかえたところもあります。昔の木山川とはすっかり形
をかえてしまっています。今では、村の人たちが奉仕作業する
ということもなく、わずかな人たちが機械をうごかして、大き
な工事を進めています。昭和五十七年末、木山川はほとんど出
来上がったような状態です。【川の名前は、ふだん使っている
よび名を本文にも使いました】

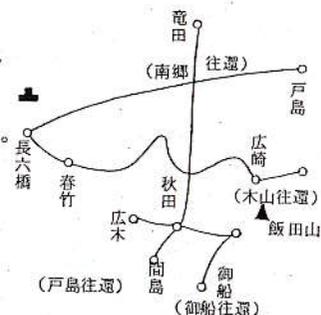


(川の改修工事)



3. 秋津の道

昔の道 ▶人々のくらしと道とは、大きなつながりがあります。
そこを人が行き来し、品物が行き来したということです。道
によって人々のくらしが、つながっていたということです。道
をひらくことは、人々の行き来をさかんにし、産業をおこし、
くらしや文化を高めることにもなります。今から三百七十年ほ
ど昔、肥後の領主加藤清正は、堤防をきずいたり、新しい水田
をつくったり、熊本を中心として、四方へ大きな道をつくった
りしました。わたしたちの秋津は、薩^{さつま}摩^ま街^{かい}道^{どう}の川尻に、深いか
かわりをもっていました。長六橋から、
秋津に近い木山にむかう道に、木山往還^{おうかん}
(沼山津ふきんは花立往還^{はなたち})があります。
往還とは道ろのことです。この道は、
八丁馬場、健軍神社を通っていました。
秋津を通る道は、立田から、保田窪、上
沼山津、東無田を通り、御船^{ごふね}にむかっていた。そのほか戸
島の品物は、戸島往還^{ましま}を通って間島^{まじま}に運ばれ川舟につみかえら
れました。



川の交通 ▶今のようにトラックなどのなかった昔、川は大切
な道ろのはたらきをしました。木山川は、もとは水が多く深く
きれいで、流れもゆるやかでした。その流れを舟が行き来して
いました。風のある日は帆をあげ、あさせはさおでこぎ、深い
所はろをあやつりました。舟は上流の広崎から、沼山津、中無
田、西無田を通り、加勢川をくだって川尻に行き、荷物をおろ
^{にもつ}

して、また川をのぼって来ました。山西や戸島などの農産物が川尻に送られました。のぼってくる舟には、肥料になる石灰やしょう油かす、酒かすなどがつまれていました。また赤井川にも、間島、東無田、新川、赤井をむすぶ舟が通っていました。間島は、川の交通の中心になっていました。とくに沼山津手永（役所）の上納米じょうのうまいをおさめる頃はいっそうさかんに舟の往来おうらいがありました。荷物をつみおろしする所を船場ふなばといい、あちこちにありました。

木山県道 ▶明治時代になると、鉄道がしかれ産業がさかんになりました。世の中の動きがかっぱつになり、町と村とのつながりも深くなってきました。明治二十五年、秋津村の人々は、近くの村の人たちとともに、熊本から木山への新しい道をねがいました。ねがいがかえられるようになった時、県の計画は花立往還を通るようになっていたので、村からはなれた県道の不便さをうったえました。人々の協力があって、三十二年に今の県道ができました。しかし小さな砂利道で今のように立派な道ではありませんでした。この県道を昔は、客馬車が走っていました。十台ばかりの客馬車あんせいばしが、安己橋と木山の間を往き来ました。沼山津神社の所に、「たて場」といわれる停留所がありました。大正七年頃、木山から安己橋あんせいばしまで、その頃のお金では十五銭せんもする高い料金でしたが、のりおりがどこでもでき便利で、昭和の初め頃までつづきました。県道ぞいは、たくさん茶店もでき、だんだんにぎやかになってきました。農家の人たちも荷馬車かまをもちはじめ、県道を通り熊本市へ作物を売りに

行きました。時代が進むにつれて県道のようなすもかわり、三十五、六年頃から道はばは広められ、三十八年頃から住宅がふえはじめて道はほそうされてきました。

村の道路 ▶木山県道ができて、馬車が通るようになった大正の終わり頃から、秋津村の道も、道はばが広げられたり、新しくつくられたりしました。今の砂取、御船線は木山県道から秋津新町でわかれて、野間のま、六嘉ろっかを通り大正十二年に、御船、熊本線につながりました。小池、竜田線は産業道路として昭和七八年頃改修されて小峰線おみねと飯野線いいのとをむすんだものです。高森木山線は昭和二十八年から工事にとりかかりました。山をこえて行くむずかしい工事のために、長い年月がかかりました。今では阿蘇南郷谷なんどうだにと熊本市とをむすぶ近道として、産業や観光に利用されています。村の中央を東から西へ長くつづいている道、ふつう学校道と云われる道は、昔もほぼ今の道にそっていましたが、道はばはせまく、どろんどろん道で、学校へかよう子どもたちは、たいへんになやまされました。そこで村の人たちの手によって、昭和五年二月から工事を始め、その年の十月十三日にりっぱな道ができあがりしました。ほそうされたのは昭和四十年代です。この頃になると熊本市は住宅がふえつづける秋津町を美しくととのえるため、区画整理くかくをして道はばを広げたり、新しい道をつくったりしました。中学校前の道もこの時改修されたのです。四十八年の終わり頃には、町の中の道もほぼ整理され、明るくきれいな町になり、くらしもいっそう便利になりました。

4. 子どものくらし

てつだい ▶「沼山津よめ行くよりげずの木のぼれ」(げずはからたちの木)という言葉がのこっていますが、これは水田だけの農村部落(六嘉、下無田)の人からいわれていたことです。

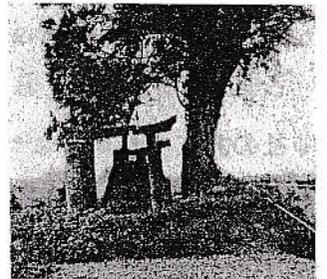
水田だけでも昔は重労働であったのに、その上畑の仕事もしなければならぬという事は、一年中休みなく働かねばならぬという事で、いかに沼山津の人が働き者であったかをあらわしているのです。一年中休むひまがなかったので、子どもたちもてつだいをしました。草かり、ひえぬき、いねじの、麦しの、すいかちぎりなど、親といっしょに働きました。6才ぐらいから農作業のてつだいをしました。農はん期には学校は欠席ばかりだったということです。朝早くから夜おそくまで家の人といっしょに働いたのです。おふろわかし、子もりなどは毎日の子どもの仕事でした。

ネンガラ ▶そんなくらしの中で、子どもたちは、やはり子どもらしいあそびをしました。お宮やお堂はよいあそび場で、子どもたちがよりあつまって、「ネンガラ」というあそびをしました。四十センチメートルぐらいの木の棒を、地面にうちつけ相手の棒をたおすあそびです。水泳は夏の楽しい遊びでした。木山川ではそのほか、魚取り、魚つりなどあそび場としても使いました。せみとり、とんぼつり、かぶと虫とり、竹馬、こま、ちょんかけ、けん玉とあげればたくさんのあそびごとがありました。ただあそびが、自分たちの手づくりのあそびが大部分であったようです。

つなひき ▶正月がすぎ、^{かどまつ}門松やしめなわ、おかざりなどをや
く「どんどや」が各部落ごとに、川どもなどにつくられ盛大に
あってました。じゅんぴは五、六年生と高等科の生徒、それに
何人かの大人の人たちでなされました。十五日にはつなひきがあ
りました。部落の有志と上級生がすべてじゅんぴしたものです。
大づなにかけられたかかりづなをもって、みんなで引きあう
のです。大人も子どもも、一しょ一いっしょうけんめいになつて一生懸命引っぱったも
のです。楽しい行事でした。

もぐらうち ▶「十四日のもぐらうち」と声をそろえて、各
家の戸口の土間を、わらをたばねて、なわをまいた棒のような
わらたばを地面にたたきつけるのです。もぐらが作物をあらさ
ないように、家の土台をほりかえさないようにとねがってうち
まくるのです。お礼におかしやおもちをその家からもらい、み
んなでわけあって楽しく食べました。

水神さんのまつり ▶三月九日、各部落で水神さんのまつりが
あります。ながいあいだ水害になやま
されてきた昔の人たちは、水の神さま
をまつって、作物ができるように、子
どもが水の事故じこにあわないようにとい
のりました。また「川まつり」といっ
て、水泳の時期に、二メートルぐら
い
の竹の先に、酒を入れたせんこう線香たてぐら
いの竹づつと、^{うり}瓜のわぎ
りをつけて、川ぎしにたて、水の神さまにそなえ、安全をいの
りました。昔の人はこのように川を大切にしたのです。

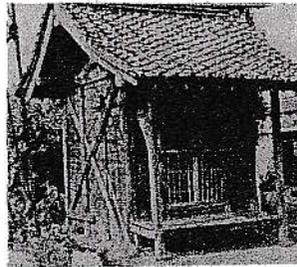


(水神さん)

観音さんのまつり

▶^{かんのん}観音さまは、^{かんぜおん}観世音ぼさつとって、人

人の不幸やくるしみをすくい、ねがいを聞きとどけてくださる^{ほつけ}仏さまです。一町内の火の見やぐらの下にまつてあります。毎年三月十八日と七月九日に、部落の人々はおまつりをしていす。親は子どもたちをまえに出して、おいのりをしたり、お礼をのべたりしていたのでした。



観音さん
(堂ん前の観音さん)

武内神社のまつり

▶農家のしごとにあわせて早い盆をすまし、八月の「^{かざ}風まつり」に風の害のないようにいのると、九月九日武内神社のまつりがやってきます。農家にかかわりの深い馬の神さまをまつてあります。まつりの日には、馬をつれておはらいをうけ、馬が病気にならないようにいのりました。お宮の前の道で、馬^お追いの行事が行われていました。馬のいななきや足音、いさましいかけ声は、子どもたちにとってそれは楽しい^{けんぶつ}見物でした。

神社のおまつり

▶まつりのにぎわいは、子どもたちによってかき立てられます。沼山津神社のまつりは武内神社と同じ九月九日です。中無田の熊野神社は九月十九日です。どちらのまつりも、元気な子どもに育つようと、すもうが行われていました。番づけのできた力士たちが、力一ばいすもうをとっていました。この日家々では、ごちそうをつくり、親せきと^{ちじん}か知人をもよんでたいへんなものでした。たくさんのおぜん立てがしてあ

りました。楽しい村まつりでした。

^{みやざ}

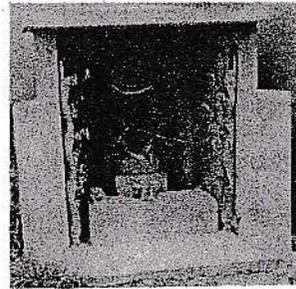
宮座

▶十月九日には、宮座という行事がありました。おみき、おかしらつき、お米などをお宮にそなえ、おまいりがすむと、組々に集まって、ごちそうをこしらえます。それから神さまにそなえたものを、ひとかけらずつもらい、ごちそうを食べながら、むかし話にはなをさかせたり、歌ったりしました。当番制でまわりまわりでするのです。当番の家の木戸口には、しめかざりなどもあって、人々の神さまに対する気持ちが、表わされていきました。

^{じぞうそん}

地藏尊まつり

▶十一月二十四日の地藏さんまつりは、子どもたちに、もっともかかわりの深いまつりでした。まつりの日が近づくと、その年に赤ちゃんの生まれた家では、「^{ほうのう}奉納はた」を^{きしん}寄進するのです。赤ちゃんが元気に育つようとねがってのことでした。まつりの日、学校から帰ると、子どもたちは地藏さんの前に集まって遊びます。地藏さんには、まんじゅう、おかし、みかんなどがそなえられています。



(中津代理のお地藏さん)

^{きょう}

経をあげてもらって、一しょにおまいりをします。それからが楽しいのです。じゅんばんできめられた家で、子どもたちみんなごちそうをたべるのです。おなかいっぱい食べ、また地藏さんの前で、すっかりくらくらなるまで遊びます。各町内にはいくつものお地藏さんが、道のかどかどにまつられています。これ

は、昔、各地区に分かれていて、それぞれの組でお地藏さんのまつりをしていたからです。

5. 秋津の遺跡

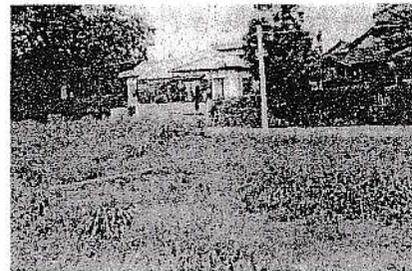
貝原 ▶木山川ぞいの東部^{おすいしよりじょう}汚水処理場のあたりを、貝原とよん
でいます。それはこのあたりの土の中から、貝がらがたくさん
出てきたからです。処理場の工事のときには、貝がらにまじっ
て、土器^{どき}のかけらや、大むかしの人の骨もほり出されました。
このことから、大むかしは、このあたりまで海が入りこんでい
たのだらうといわれています。

沼山津^{じょうしんいせ}縄文遺跡 ▶また、沼山津神社のあたりからも、大むか
しの人々が使ったと思われる、石のおのが見つかりました。そ
のころは、縄文時代といって、人々は木の実を食べたり、魚や
うさぎなどをとって、くらしていました。まだ、金物を使うこ
とを知らませんでしたから、どうぐはみな石や骨や、木や貝で
つくりました。この石のおのもその一つです。沼山津神社のあ
たりには、大むかしから人々が住んでいたのでしょう。

沼山津^{てなが かいしよ}手永の会所あと ▶二町内の浄福寺まえを、二百メー
トルほど東へ行くと、左がわに、えの木の大木があります。その
あたりが「会所んあと」とよばれていて、古い井戸や、石垣の
根っこがのこっています。沼山津手永の会所のあとです。細川
氏が熊本をおさめるようになると、「手永」という政治のしく
みをつくりました。手永は二十から三十もの村がまとめら
れたもので、さらにいくつかの手永がまとめられて、「郡」と
なっていました。その村の代表が「庄屋^{しょうや}」手永の長が「惣庄屋^{そうしょうや}」そ

して郡の長官が、「郡代^{ぐんがい}」といって、それぞれおもい役目の仕
事をしていました。沼山津手永は、木山、津森から白川べりの
戸次、曲手などにおよぶたいへん広い手永でした。中心となっ
て仕事をする役所があり、多くの役人たちがいました。その役
所が「会所」であり、年々米の取り立てや悪人^{あくにん}の取りしまり、
さいばんなどいろいろな仕事をしていました。今でも「門前」
とか、「仕置場^{しおきば}」というところなどがのこっています。むかし
は広い敷地^{しきち}に、大きなたて物がたっていました。

舟つき場 ▶会所あとから、南へ五十メートルほど行くと、木



(舟つき場あと)

山川のあとにむかしの舟つき場
のあとがある。今はかわりはて
ておもかげもみられないが、白
かべの大きな蔵^{くら}があった。舟つ
き場の石だんも石垣も、木山川
の改修でうもれてしまった。五
十前まではりっぱに残っていました。江戸時代の木山川は、深
さが三メートルもあり、ゆたかな水が加勢川^{ごうりゅう}に合流し、川尻
の方へ流れていました。その川を、十トンもの大きな舟が、白い
帆をあげて行き来しました。舟つき場では、たわらをかついだ
人たちが、ひとりずつ、蔵のくぐり戸をとおり石だんをおりて
舟につみこんでいました。陸の交通がはっだつして、舟つき場
がなくなりました。

横井小楠と四時軒 ▶秋津小学校から、五百メートルほど東に
行くと、校歌に歌われている四時軒（小楠塾）があります。そ

こは横井小楠先生のすまいのあとです。先生は文化六年（1809年）

に、今の内坪井町に生まれました。おとうさんは、肥後藩のさむらいさんでした。小楠は、子どものころの名を又雄といい、八才のときに、じしゅかん 時習館というはんとう 藩校（学校）に

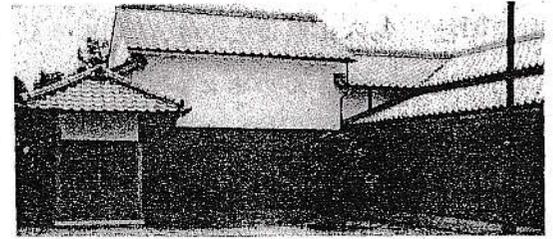


横井小楠（1809～1860）

入りました。学問がすきでよく勉強じゅくちようしましたので、二十九才のときには、塾長（今の校長先生）になりました。小楠はそののちも、学問にはげみました。江戸（東京）に出て、すぐれた学者と話したり、熊本に帰って、なかまと研究会をつくったりしました。小楠が四十六才のとき、おにいさんがなくなったので、家をつぐことになりました。しかし、多くの家族をかかえて、城下町では苦しい生活でしたから、くらしやすいなかの沼山津に、うつりすむことにしました。安政二年（1855年）、四十七才のときのことでした。今のこっている四時軒は、そのげんかん 玄関と客室、それに板の間だけですが、その頃は、家族の居間や、塾生（小楠の生徒）が勉強する塾棟じゅくどうなどもありました。小楠は、この家に四季（春、夏、秋、冬）のけしきが、いつも美しいところという意味で、四時軒と名づけました。熊本市は先生の功せきをたたえて小楠記念館と、もとの家をつくる（復元）ことをおもいたち、昭和五十七年にできあがりしました。小楠の教えは、「今までの日本人の心がけを生かして、国のきまりをつくろう。しかし、電とうや汽車もない日本に、西洋の文明は取り入れなければならない。そして世界の人々が、正しく、なかよく、くらししていける世の中をつくって

行こう。」というものでした。小楠のこの考えをいかして、なかま

（実学党）や弟子たちは、おくれていた熊本に、医学校や洋学校をつくったり、工場をたてたり、西



四時軒（復元）

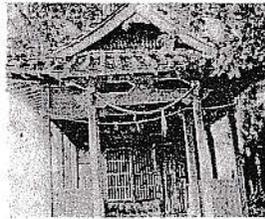
洋の牛や植物を取り入れたりしました。また小楠のすぐれた考えを学ぼうと、国内のあちこちから、多くの人々が四時軒をたずねて来ました。土佐（高知県）の坂本龍馬などもそのひとりです。小楠は、えちぜん 越前藩（福井県）の殿さまからまねかれて、藩のおさめ方に、ちえをかしたこともあります。新しい明治の世の中になると、さんよ 参与（大臣）として政府にむかえられました。そして右大臣、いわくらともみ 岩倉具視のそうだん役としてかつやくしました。しかし、明治二年一月五日、（新暦の二月十五日）だじょうかん 太政官（役所）から帰るとちゅう京都の丸田町で、小楠に反対する人々におそわれました。小楠はかごから出て短刀をぬき、六人をあいてにたたかいましたが、年もとり、病気のあとでもありましたので、ついにたおされてしまいました。六十一才でした。京都の南禅寺てんじゅあん 天授庵に、墓がありますが、かなしんだ弟子たちは、小楠のかみの毛を持ち帰り、今の小楠公園に墓をたて、手あつくほうむりました。そして、数多くの人々が、その教えを受けついで、新しい世の中のためにはたらきました。まい年、二月十五日にぼぜんさい 墓前祭が行われ、わたしたちの学校の代表も出席して、小楠先生の話聞き、おしえをうけているのです。

6. 秋津のお宮とお寺

沼山津神社 ▶木山県道と小池、竜田線の交差点の近くにあります。むかしはたくさんの木にかこまれて、一段と高いところがあり、深い森でした。今はすっかり変わっています。鳥居が二つあって、中の石だんの先に、「権現宮」と書かれた、石の額のある古い鳥居があります。「権現」というのは、仏さまがすがたをかえて、日本にやって来られ、神さまにおなりになったお方です。鳥居の柱の文字をみますと、250年も前からお宮があったことがわかります。拝殿の中に「絵馬」といわれる額があります。これはむかしの人々が、おまいりのお礼のしるしとして、神社におさめたものです。拝殿の左がわに、石の柱があって、このお宮のれきしが書かれています。熊野宮(浮島)から分かれたお宮が、明治のすえに今の場所にうつって来たそうです。

武内神社 ▶沼山津神社から南の東入小路のおくに、ふだん馬神さんとよばれている竹内神社があります。もとは年禰社とよばれていましたが、明治になって、武内神社となりました。牛や馬の神さまをおまつりしており、農家の人々にとって、たいせつな神社です。拝殿の天じょうにはたくさんの馬の絵がかかれ、おさめられている「絵馬」もみんな馬の絵です。「年禰」とは「祈り」の意味です。

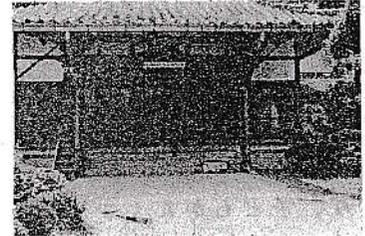
中無田熊野神社 ▶三町内に熊野神社があります。もと熊野権



(竹内神社)

現(浮島)のみたまをわけておまつりしてある権現宮の一つです。昭和三十七年に、350年祭がありました。お宮のけいだいほのこっている燈ろうとか、大木が、昔のことをみなが知っていることでしょう。沼山津神社とともに、村のちんじゅの神さまとして、村の人々の大事なまもり神です。

光輪寺 ▶沼山津上津代里にある光輪寺は、順信というおぼうさんが元文四年(1739年)にたてたもので、日本ではじめての「大師号」をもつ慈覚大師のつくられた阿弥陀如来さまを、おまつりしてあります。



(光輪寺)

昔この寺は、「千福庵」といって、別の如来さまをおまつりしてありましたが、小西行長がいくさをしたとき、たてたものはみなやけてしまいました。如来さまだけは、はこび出すことができました。今はその如来さまも安ちしてあります。

浄福寺 ▶沼山津会所あとから西へ、三百メートル。この寺は元龜二年(1571年)にたてられたものです。しかし千福庵と同じように、寺は全部やけてしまいました。そのとき、この寺でも、慈観というおぼうさんが、仏像だけを持ち出して、土の中



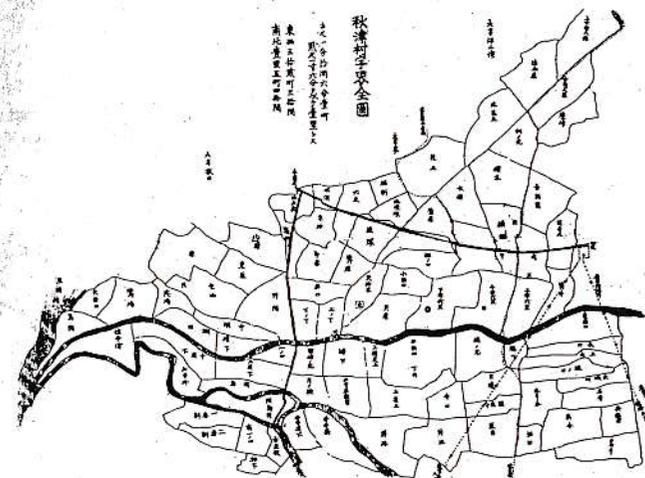
(浄福寺)

にうめました。その後、観清というおぼうさんが、仏像をほり出して、今の浄福寺をたておまつりしました。弟子の秀海と

いうおぼうさんは、慶長十八年（1613年）に「浄土真宗」というものにあらため、初代の住職になりました。寺のうらに広い墓地があり、二、三百年ものむかしの、古い墓がたくさんならんでいます。だれの墓だかわからないものも多いようです。

なかつより
中津代里地蔵 ▶地蔵尊または地蔵ぼさつといわれる仏さまで、じゃかがなくなってから、みろくぼさつがあらわれるまで、人々をすくうといわれています。なかつより中津代里（一町内）の道ぞいにあります。いずれも明治よりも前にたてられたものです。地蔵は、子どもと深いかわりがあります。むかし、悪い病気がはやり、子どもがたくさん死んでいきました。思いがけないことでけがをしたり、死んだりする子どももいました。それで子どもを守るために、あちこちに地蔵さんがたてられたということです。今は、近所のお年よりが、花や水をかえたりしてお世話をしておられます。

うぐいすの観音 ▶今から四百年も昔、泉ヶ丘小学校のところに、「うぐいす城」とよばれた陣内城がありました。甲斐の正運という殿さまが、城を守るために、洞春というおぼうさんをまねいて、「黄鳥山法光寺」という寺をたてました。黄鳥というのが「うぐいす」を表しているのです。豊臣秀吉とのいくさで、城も寺もやけ、甲斐家はほろびました。その後、加藤清正のころに、寺のあったところに、「野原山放光庵」がつけられ観音さまがまつられました。秋津小学校の西、五分ほど行ったところに観音さんがいます。「うぐいす川」とか「うぐいす原」とかいう名前は、ここから出ているのです。



(秋津村字界全圖)

あとがき

郷土秋津のうつりかわりは、「郷土を知る学習」をするため郷土学習部の先生たちでつくりました。この本を読むみなさんは、秋津の歴史を学び、昔の人が残してくれた、すぐれた伝統と文化をうけつぎ、郷土を愛し、郷土の発てんにがんばってください。紙面のつごうで思うようにつくれませんでした。この本をつくるにあたっては、郷土学習部の先生と、さきにつくられた「うつりかわる秋津」の先生方に感謝したいと思います。

(係 西村忠之)

参考資料 うつりかわる秋津、秋津村略史、上益城郡誌、郷土広崎(木本寅雄)くまもとの自然と文化(市教委)熊本市史、秋津八十周年記念誌、肥後国誌、熊本県の歴史(森田誠一)

他



玉野木

玉野木

